

2026年9月13日

説教題『神と格闘する夜』創世記 32 : 23～32 ～創世記⑦～

主任牧師 加藤 誠

「その人は言った。お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」(創世記32章29節)

誰もが一度や二度は、眠れない夜を過ごされたことがあると思います。先日ある方が一晩中いろいろな思い巡らして寝つけなかった経験を語ってくださったのですが、わたし自身もいろいろな眠れない夜を経験してきました。不安でしかたない夜、怒りからかれて寝付けない夜など。これから自分が歩むべき道に悩み、眠れない夜もありました。今日は、その眠れない夜を神と共に過ごしたヤコブの話です。

先週は、ヤコブが故郷の家を出ていかなければならなくなった経緯を読みました。ヤコブは兄エサウの祝福をだまし取って激怒させてしまい、家に居られなくなったのです。初めての荒れ野の長旅が無事に守られ、母方の故郷に着いたヤコブは、叔父ラバンのもとで羊や山羊を飼う修行を積みます。ラバンの信頼を得て、その娘たちを妻とし11人の息子を与えられたヤコブは、たくさんの家畜をもつ者になるのですが、ただ、叔父ラバンがくせ者で、ヤコブは何度も約束を反故にされて二十年もの月日が経ってしまいます。しかしその二十年は、神の約束に支えられて忍耐を学び、家畜を飼う知恵を学び、人間として一回りも二回りも成長させられた月日でもあったのです。

ヤコブは、ついに妻と息子たち家族とたくさんの家畜と共に故郷に帰ることにします。しかしいよいよ故郷が近づくにつれて、彼の顔は不安と恐れに取りつかれ青ざめていきました。彼は神にこう祈っています。「どうか兄エサウの手から救ってください。わたしは兄が恐ろしいのです」(31・12)。「父イサクが死んだら、絶対にヤコブを殺してやる！」と叫んだ兄エサウの言葉が、二十年経ってもヤコブの胸に刺さったままであり、兄エサウの復讐に対する恐れがヤコブの心にあふれたのでした。

ヤコブは兄エサウのご機嫌うかがいのため、事前に使いの者を送って丁寧に挨拶をさせたのですが、帰ってきた使いの者が「お兄様はあなたを迎えるため、四百人のお供を連れてこちらに向かっておられます」と伝えたものですから、ヤコブは震えあがります。そして思い悩んだ末に、同行する人々と家畜を二組に分けます。もしエサウに襲われたとしても、全滅はまぬかれるように知恵を働かせたのです。さらに、ヤコブは兄エサウの気持ちを少しでもなだめるため、雌山羊二百匹をはじめとする家畜の贈り物を整えて、自分たちの先頭に行かせたのでした。

そして、いよいよその夜、この川の向こう岸に故郷が広がるヤボク川を渡ったヤコブは、妻と子どもたちを先に行かせて、独りその場に残って夜を過ごしたのでした。いくら知恵を使っても、ヤコブの心の中の恐れは消えなかったのでしょう。すると眠れぬ夜を独り過ごすヤコブに「何者か」が近づき、夜明けまで格闘したというのが今朝の場面です。この「何者か」は主なる神でした。神が組み合ったヤコブの腿の関節を打ったために脱臼してしまいますが、それでもヤコブは組み合いを止めようとしな

い。夜が明けるまで食い下がるヤコブに根負けをした神は「お前の勝ちだ！」と告げて言います。「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ」と。

このヤコブと神との格闘はいったい何を意味しているのでしょうか。ヤコブの我慢強さ、神の祝福をもらうまでは決してあきらめない、その粘り強さが認められたお話なののでしょうか。ヤコブがこの時、神からもらった名「イスラエル」とは「神（エル）」は「戦う、支配する（サーラー）」の意味です。この夜の格闘では「ヤコブが神に勝った」はズですが、「神が戦い、神が支配する」という名をヤコブはもらったのです。ここにどういう意味があるのでしょうか。わたしが思い至ったのは、この場面は「神」を主語にして「神が戦い、勝利してくださる」ことを伝えているのではないかということです。この夜「神は」恐れと不安に押しつぶされ眠れずにいたヤコブに一晩中付き合い、がっぷり四つになって相手をしてくださった。そして「神は」ヤコブに勝ちを譲り「ヤコブ、大丈夫だ！わたしが共にいる。わたしがあなたに勝利を導く！」と励ましてくださった。そうなのです。「ヤコブが」神と格闘した夜は、「神が」恐れと不安と闘うヤコブに付き添い、「神が」共に居てくださることを教えて励ましてくれた夜だったのです。

そして、このお話でもう一つ興味深いことがあります。それは闘いに勝ったはずのヤコブが腿を痛めて足を引きずっていた…という記述です。わたしは、この腿の痛みは、ヤコブに「この夜のことを忘れないように」与えられた「恵みの痛み」だと受け取ります。「ヤコブが」自分の力で恐れを克服したのではない。「神が」私たちの一番弱いところに共に歩み、私たちを励まし、そして神の勝利に導いてくださる。その神への信頼を忘れないように与えられた「恵みの痛み」なのではないかと。

恐れには二つあります。生き物として「本能的に危ないと感じる恐れ」と、「知恵あるゆえに想像を膨らませて抱く恐れ」と。前者の恐れは命を守るために大切な感覚ですが、後者の恐れは私たちが勝手に恐れを過大に膨らませている場合も少なくありません。恐れを抱くこと自体は自然なことですが、私たちはその恐れを冷静に見つめ、ほんとうに闘うべきものを見つめ、そして自分には抱えきれない恐れは、私たちを愛してやまない神を信頼し、ゆだねていく信仰が求められます。いや、愛なる神を信頼してゆだねていくとき、私たちは自分が何を恐れているのかを冷静に見つめ、自分がほんとうに闘うべきものを見分けていく知恵をいただくことができるのです。

今日は「ホームカミング礼拝」です。教会の礼拝はいつでも帰って来れる場所。私たちは時々「こんな失敗をした自分はダメだ」と人の視線を避けたいのですが、教会の礼拝はどんな状態であっても帰ってこれる場所。人の視線を気にする必要はまったくありません。なぜなら神はどんな時でも「あなたの席を用意してあるよ」とあたたかく迎えてくださるからです。そして私たちが自分の力ではどうしようもない不安と恐れに襲われて眠れない夜を過ごすとき、その私たちに寄り添い、励まし、一緒に戦って、その不安と恐れを支配してくださる神さまがおられることを聖書から受けていきたいのです。